



日口交流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel: 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



茶道体験リベンジin 田町リーブラ

安部 花子

4月10日、田町リーブラでの茶道講習会に参加しました安部と申します。昨年8月に初めて茶道講習会に参加し、今回が2回目の参加です。

前回参加した際、自らのあまりの勉強不足に消化不良だった私は、講習会終了とともにリベンジを決意。お運びさんのやり方を事前に調べ、さらに雰囲気づくりのために和服を着てチャレンジいたしました。和服の着方については、同じく昨年8月に開催された浴衣着付け講習会にて習得済、もはや怖いものなど何もありません。(結果は写真の通り、中古で買った着丈の合わないつんつるてん袖の袷に、衿芯の入っていないヨレヨレ衿の長襦袢を着て満面の笑みで写っているのが私です(笑)。でも楽しかった。)

今回もかなりの大盛況で、ロシア人参加者含めて30名程度はいらしたかと思います。千葉副会長がひととおりレクチャーをしたのち、実際に茶菓子和抹茶を味わうといういつもの流れだったのですが、あまりの人数の多さに、全員に抹茶が行きわたるまでに時間がかかってしまい、お待たせして



しまう人もいらっしゃいました。こんな時に限って動きにくい和服!そしてお茶碗も足りない!履きなれない足袋のせいで常にコケそう!

しかしながら、ここは茶道の場。迅速に飲み物を提供するだけならレストランと変わりません。あくまで一つ一つの動

作を丁寧に行い、参加者全員が一体となって優雅な空間を作り上げることがおもてなしに繋がる——前回の茶道講習で、初心者ながら得た気づきです。

今回も完璧には程遠い私の「お運び」でしたが、ロシア人参加者の皆さんは待ちくたびれた顔一つせず、私の差し出した抹茶を温かく受け取ってくださいました。お互いに一礼をして目と目が合った時、この場を楽しんでいる気持ちや、文化に触れてその中に溶け込むことに対する喜びが見て取れました。マスクをしていても言葉を交わさなくても、しっかりと伝わるものです。微力ながらそのような思い出作りの一助となれて、私もその日一日を幸せに過ごせました。

日本人だけの茶道講習会や着物着付けイベントなどに参加すると、初心者向けをうたっている、自分以外の参加者が当然のように手慣れた動きをしていたり、高そうな着物を持参していたり…本物の初心者にとっては、勇気を出して参加してみたにも関わらず、何となく気後れし、敬遠してしまうようなことも少なくないかと思います。

しかし今回のロシア人参加者の皆様のような、より異質なバックグラウンドを持つ人々を対象とした講習会においては、前提となるハードルが低いのでそのような心配は皆無。正直私もこの会でなければ、和服を着てみる勇氣は出なかったと思います。ロシア人のみならず、私たち日本人初心者にとっても、気楽に存分に、自国の伝統文化に触れて楽しむことができるこういった場は非常に貴重で、今後も是非継続して実施されていくことを望んでやみません。ベテランの通訳の方、今回の講習会を企画・準備していただいた皆様、本当にありがとうございました。

お知らせ

●講演会『キルギス・日本国交30周年の歩み』

日時: 2022年7月16日(土) 13:30~15:30

講師: 駐日キルギス共和国特命全権大使

ミルラン・アルスタンバエフ氏

会場: 田町 男女平等参画センター「リーブラ」学習室C

会費: 学生・ロシア人500円、会員1,000円、一般1,500円

*事前に協会までお振込みください。

●ロシア語クラス生徒募集中!

水曜: 初級1A-1 (19:00~20:00) 初級1A-2 (20:05~21:05)、土曜: 上級 (10:00~11:30) オンライン準中級 (月曜18:00~19:00)、日曜ゼロからクラス (18:00~19:00)

●新設ロシア語講座「ロシア語の泉」(1)

日時: 2022年6月5日、12日、7月3日(日) 13:30~16:00

講師: スニトコ・タチヤナ先生

会費: 会員7,000円、一般8,000円(3回分)

会場: 田町リーブラ、新橋ばるーん(変更もありますので、お申込みいただいた際にお知らせいたします。)

●ゆかた講習会

日時: 2022年6月26日(日) 13:30~15:30

会場: 麻布区民センター 和室

会費: 留学生500円、日本人1000円 男性も歓迎です。

ゆかた、半幅帯、布紐2本持参(お持ちでない方は要相談)

お問合せ: 日口交流協会事務局

FAX: 03-5563-0752 e-mail: nichiro@nichiro.org

お願い

NPO日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらかでも結構です。

島山堅蔵氏、山岸ひさ子氏にご協力いただきました。ありがとうございます。

振込先: 郵便口座00160-9-66486、加入者: 日口交流協会
連絡先: 日口交流協会事務局 E-Mail: nichiro@nichiro.org
Tel: 03-5563-0626 Fax: 03-5563-0752



きもの体験交流 (1)

千葉 麻里

2022年4月28日(木) 午後から、毎年恒例のきもの体験を通商代表部の方々にしていただきました。

例年通り、ホールに何枚もの敷物を広げ事前に郵送したダンボール2箱分のきものに、持参したものを加えて置きます。仕事の合間をぬって、時間差で入ってくる方々に、それぞれ好きな色のものを選んでもらいます。女性の振袖は色とりどりで華やかなので選ぶのも楽しいです。

今回は、意外にも男性の希望者が多く、写真撮りで外に出るとなかなか帰って来ないので、次の方が待つようになってしまいました。男性用は正式なものと言えば、結婚式に着るような黒の紋服になりますが、できるだけ大きいものを用意したつもりでも背丈が足りずに苦労しました。

振袖もお好みの色を他の方が着ていると、写真撮りの間、待つことになります。3歳、7歳用のきものは人気のきものが集中したりするので、余分に持ってくる必要を感じました。



着付けは辻田直美、林由美子、木挽輝香のいずれもベテランの着物の指導者で初めてではなく、安心して一緒に仕事のできるメンバーです。山岸さんもお手伝いに立ち寄ってくれたので、見ていただきました。

主席代表のバブレンコさんも参加してください、ご家族で撮影して楽しんでいただきました。今回も、一人で二枚着ていく方もいらっしゃいました。着物愛好家が増えてくだされば、これほどうれしいことはありません。女性13名、女の子4名、男性10名、男の子4名の計31名の

方々が参加されました。

最後に、いつもながらご婦人方のお菓子をお頂戴し、ゆっくりとお茶をいただいて会場を後にしました。いつも協力してくれる同僚の着付けの先生方、ありがとうございます。日本の伝統文化に関心を寄せてくださる通商代表部の皆様にも感謝いたします。

国際放送史研究の戯言No017

ふたたび石井次郎さんについて

島田 顕

今年の4月初め、ある人のお見舞いで慈恵医科大学病院に行った。その人の検査中、2時間ほどひまをつぶさなければならなかった。図書館に入ってみた。医学の知識がない私が何のために医科大の図書館に立ち寄ったのか。それは、石井次郎さんのことを調べるためである。

読者の皆さんは覚えていらっしゃるだろうか。戦争直後のモスクワ放送に異色の経歴を持つ人物がいたことを。それが石井次郎さんである。私は2018年の本誌の272号(通巻403号)「石井次郎について」で、石井次郎さんのことを書いた。医科大卒業後、北樺太を経て、ハバロフスク局、そしてモスクワ局に転勤した人物である。

本当にこの大学を卒業したのか。手がかりはないのか。図書館職員のアさん(カウンター担当)に事情を説明し、たずねたところ、親切にも同窓会名簿を調べてくださり、同窓会名簿に「昭和九年卒 皮膚科 相模原 石井次郎」とあることがわかった。またアさんは、医籍総覧などを見る必要があることをアドバイスしてくれた。さらに慈恵医科大の同窓会にはHPがあることを教えてもらった。

まずは石井次郎さんが、本当にこの医科大学を卒業したのだということがわかり、自分のことのようにうれしかった。加えて、相模原と書いてあることは、やはり石井次郎さんが日本に帰ってきたのではないかと考えた。帰宅して、自分が書いたものを見返してみると、石井次郎さんは1934年(昭和9年)から勤務医であることから、やはり同一人物であると確信した。「昭和9年卒」であることは、1928年入学であり、さらにさかのぼれば医学部は6年で卒業であるので、知っていたデータは「1910年生まれ」だから、医学部卒業時年齢24歳を足せば1934年=昭和9年ということになる。

さらに石井次郎さんについてはさまざまな史料が見つかった。1950年の史料では、唯一日本人職員として名前が挙げられていた。このことは、自分自身の最新論文(島田顕「1950年のモスクワ放送日本

語番組——冷戦期の日本語放送に対する評価と改革提言」『早稲田大学アジア太平洋研究』第43号、2021年3月)にも盛り込んだのだが、この史料での石井次郎さんの生年は「1912年生まれ」となっている。もう一度史料を見直してみたがやはり「1912年生まれ」だった。

川越史郎さんの有名な著書(『ロシア国籍日本人の記録 シベリア抑留からソ連崩壊まで』中公新書、1994年)には、「皮膚科の勤務医」と書いてあるが、川越史郎さんのさらに詳しいエッセイ(「ソ連の対日マスメディアで活躍した日本人(1)」『月刊社会主義』2005年4月号)を見つけた。それによると「モスクワ市内の病院に皮膚科の医師として勤めることになった」とある。またフルシチョフの雪解けが始まった頃に日本に永住帰国したという。

また、モスクワ放送の職員を経てグラフ誌『ソビエト婦人』の編集長になった赤沼弘さんのことを知りたくて、同誌を調べていたら、石井次郎さんの名前を見つけることができた。1958年5月号には、「モスクワ市コロレンコ病院勤務医師石井次郎」、1959年6月号には、「皮膚科医師石井次郎」とある。石井次郎さんの記事、翻訳は、1956年から30件ほど確認できた。うち医学関連のものは11件になる。最後に石井次郎さんの名前が載ったのは、1962年3月号。これ以後名前がないということは、川越史郎さんの話にあるように帰国したのだろうか。だんだんとそう思うようになってきた。

慈恵医科大図書館で教えてもらった『医籍総覧』を国会図書館の検索にかけてみたら、最近のものしかなかった。それで、「医籍」という言葉でもう一度検索にかけてみると、『日本医籍録』という本があり、戦後直後も出版されている。これを、特に1962年4月以降を調べるべきだと思った。また同窓会名簿には「相模原」とあるので、同窓会や相模原市の医師会にも問い合わせる必要があるだろう。まだまだやれることはありそうだ。

《モスクワ・アラカルト70》

今、私ができること

日向寺 康雄

ロシア軍のウクライナ「侵攻」により日本中で高まった嫌ロ感情から、私は、大学で担当する「文化論（ロシア）」の受講生は今年きっと激減するだろう、そう勝手に思い込んでいた。しかしそれが驚くべきことに激増した。中央法学部では、例年15人から40人ほどのところ、何とその数106人に達した。皆、アンケートに「こういう状況だからこそ、ロシアをもっと知りたい」と書いている。私は、今の若者達を見直すと共に安易なネガティブ発想に逃げこもうとしていた自身を恥じた。せっかくなので学生の許可を得て、いくつか意見を御紹介したい。

彼らは皆一様に、ロシアが国境を越え軍事作戦に踏み切った事を強く批判し、もし「虐殺」などが事実であれば許せないとしながらも、報道のされ方が一方的過ぎるのではないかと直感的違和感を覚えている。S君は「ロシアが悪、ウクライナが正義という西側の報道は偏りすぎて東西冷戦を想起させる、都合のよい事実を切り取って報道し、明らかに誘導している」、またA君は「日本の報道は欧米に追随したもので、一方的な情報しか流していないと私も理解していた。そんな報道だけを聴いていると、物事の本質が見えない。しかしネットを探しても、ロシア側の主張や考え方はうっすらとしか見えてこない。なので絶対的な悪者とされるロシアの事をきちんと理解したいと思った。国の歴史だけを遡るのではなく、文化レベルで学んでみたいし、そもそもお隣の国なのに、あまりにも情報を知らない。こうした理由から履修したいと考えた」と書いてくれた。

さらにT君は「ロシアの『背景』なども理解しようとせず『みんながそうだから』と頭ごなしに批判する日本人も観ていていかなものかと思う。根本的な解決のためには、この国の文化や考え方などを我々は知ろうとしなければならない、そうした姿勢が今の日本人には特に欠落していると感じる。今後の授業を通して、ロシアという国の『背景』をしっかり学習し、きちんと自分自身の頭で考え意見を持ちたい」と書き、次のようなエピソードを紹介してくれた。

「私の祖母は1932年満州生まれ、残念ながら3か月前に亡くなったが、今年で90歳だった。そんな祖母が終戦後にロシア兵に助けられた出来事を私によく話してくれた。詳細は分からないが、終戦後空腹で倒れそうにしていると、何かの警備をしていたロシア兵2人にパンをもらったとの事『その時のロシア兵の顔が今でも忘れられん。あの人にも今、孫がおるんかな』といつも言っていた。間接的にだが、ロシア人兵士の2人は私たち家族にとっては命の恩人だ。そんな方の孫が、今戦地で闘っているかもしれないと思うと、一刻も早くこの争いが終結することを願うばかりだ」。

日本での生活は辛い事も多いが、もし私のモスクワ暮らし30年の経験が少しでも役に立つのであれば、学生達の若く真摯な知識欲に応えるべく、自分は懸命に今なすべきことをするだけである。

(中央大及び早稲田大学非常勤講師、元モスクワ放送チーフアナ)

コラム:

日本人のロシア語学習歴について

島山 堅蔵

今回は200年以上ある「日本人のロシア語歴」の中で、日本人によりいつロシア語の勉強が始まったか、明治以降の“ロシア語教育の特色”、そして“現在の日本国内のロシア語教育体制”状況を記載します。(一部日本ロシア文学会“日本人とロシア語”より)

1. ロシア語学習の先駆者

日本におけるロシア語の学習は伊勢の漂流民・大黒屋光太夫の日本への帰国から始まったとされる(寛政4年、1792年)。大黒屋光太夫のロシア語のレベルは文字と単語レベルであったが、その功績はロシア語の知識を蘭学者の馬場左十郎に伝えた点にある。馬場左十郎はゴローニン(1811年に国後島で捕縛され、2年3カ月日本に抑留された)に直接従事し、学習範囲が文法・文章レベルまで一気に高まったとされる。

2. 明治・大正時代のロシア語教育の特色

1) ロシア語の勉強は立身出世を目指したものではなかった。

新東京外語学校: 1899年設立。(現在の東京外国語大学の前身、5年制) 卒業生を見ると、支配勢力であった薩長出身者はほとんどいなかった。(有名な卒業生は二葉亭四迷。1899年9月 - 1902年5月まで母校のロシア語科で教鞭をとった。)

2) 日露戦争を予感した情報要員の育成

- 東邦協会露西亜語学校: 1892年開校。ロシアに対する関心への要請に応えるため。

- 北海道露語学校: 1897-1900年まで。主目標は日露戦争を予感した情報要員の育成

3) 日露戦争後、ロシアとの関係を重視し、情報収集するための人材育成

- 哈爾濱(ハルビン) 学院: 1919年10月から授業が開始された。ここで助教授として教鞭をとられた染谷先生は戦後上智大学・ロシア語科創設(1958年)時教授としてロシア語教育に深く関わった。染谷教授の前で、ロシア人がロシア語を話すのを(文法が間違っていないか心配で) 恥ずかしがっていたとの話を聞いた。

3. 現在の日本国内のロシア語教育体制

現在のロシア語教育の目的は「日本とロシアを繋ぐ人材確保」が中心で、ロシアの現実を正しく理解し、人々との交流を発展させ、文学・文化・歴史などを深く理解出来る人材育成を目指している。そのための教育体制は以下の通り。(2014年実績)

1) ロシア語を第一外国語として学ぶ事が出来る大学: 20大学
ロシア語を第二外国語としている大学: 国立44校、公立19校、私立82校で、大学の総数の約20%に当たる。

2) ロシア語教育開設高等学校: 公立23校、私立4校で約500名超が履修している。

3) 最近の傾向: 平成29年度に始まった“大学の世界展開力強化事業(ロシア)”には日露双方21大学(計42校)が参画し、大学・学生の交流が進んでいる。

当協会でも今後学生達など若い人たちの意見を聴き、参考になる情報を発信する事業活動を活性化させて行く方針。

(次回の予定は“ロシアにおける鉄道事情”)

(事務局長)

ロシアの冬

畔上 明

ロシアのウクライナへの軍事侵攻は、ロシアに思いを寄せる人々へその心身にわたる活動に大打撃を与え、凍てつくロシアの冬の時代がいつまで続くことかという悲痛な思いは底知れません。

私にとって大学進学に思い悩んだ時期、1968年のプラハの春が戦車で潰されたことに恐れをなし当時の地下出版の真摯な声を聴き19世紀のロシア文学の力に救われた個人的体験から、ロシアの良心に耳を傾けるべく結果的にロシア文学専攻を選んだ経緯がありました。さらに1979年にはソ連軍アフガニスタン侵攻により、翌年のモスクワ五輪がアメリカや日本を始めとする50近くの国々によってボイコット、勤め先であったソ連専門旅行社がガタガタと揺れ動く悲運に晒されました。

そのような時期ではありましたが、比喩的ではないロシアの冬の景観そのものには魅力がありました。年越しはロシアで迎えるのが常であった1970年代後半から80年代、国営旅行社インツォリストが「ルースカヤ・ジマー(ロシアの冬)」と銘打ったプログラムには、訪問都市の各劇場での毎晩のオペラ、バレエ鑑賞、近郊の公園ではトロイカ乗り、橇滑り、円陣となって様々な国の人たちと共に野外ゲームや歌と踊りに興じる雪祭りの広場が用意されています。大晦日の晩11時、レストランでの年越しパーティーが始まると酷寒爺さん(サンタクロース)や雪娘が現れ、共に踊り飲みあかし、カウントダウンでピークを迎え新年を祝います。

ロシアでの正月を共に過ごしたメンバーとしてある年「岩波書店」岩波雄二郎(1919-2007)会長が参加。赤帯にパラフィン紙で包まれた岩波文庫の外国文学



に小学生の頃から親しんできたこともあり、トルストイやチェーホフと出会う機会を与えてくれた創業者の岩波茂雄(1881-1946)氏に対して尊敬の念を抱いただけに、あと継ぎの雄二郎氏との初対面に緊張しました。やや面長な氏はたいへん気さくで屈託がなくそのお人柄の故にわだかまりなく接することが出来た思い出が残ります。

1968年に雄二郎氏が自費で設立した岩波ホールに於いて、奥様の妹でその総支配人となった高野悦子(1929-2013)さんが1974年よりエキブ・ド・シネマという隠れた名作映画の上映運動に力を注いでいるという話題に、最初に上映されたサタジェット・レイ監督「大樹のうた」に心打たれ、タルコフスキーの「惑星ソラリス」や「鏡」、シェンゲラーヤの「ピロスマニ」に感化されたこと等を話したものでした。

残念なことに今年7月29日に、私とは同い年である娘の律子さんの手によって岩波ホールが幕を閉じることは皆さんご存じの通りです。

律子さんが1976-78年パリへ留学されたこともあり、フランスとの交流も幅広くなさっておられた雄二郎氏、モスクワの空港に向かうバスの中で、ロシアの友人女性と共にフランス語でシャンソンを私たちに披露してくれたのでした。

ロシア語の文法では名詞は6通りの格変化があり、「～によって」という造格の複数形は-アミという語尾変化となります。畔上(アゼガミ)という発音はロシア人からするとアゼグたちによって、というように聞こえることでしょう。そして岩波(イワナミ)という名前は、イワンたちによって、という何とも象徴的な複数造格の形であるといえます。(「プロコ・エアサービス」シニアアドバイザー)

モスクワ「ムゼイ」巡り・その32

クスコヴォ Усадьба Кусково

大矢 温

時節柄、ますますハードルが高くなってしまったロシア旅行だが、今回もヴァーチャルでロシア文化に接していこう。で、今回ご紹介するのは「クスコヴォ」。18世紀にП. Б. Шереметьев伯爵が夏の離宮として建設した庭園だ。帝政ロシア時代、皇室や大貴族たちは都会に構えた宮殿のほかには郊外に離宮を設けて贅を競ったものだった。ペテルブルク周辺だとエカテリーナ離宮やペトロゴフなどが有名だが、モスクワは「商人の都」だったためか、ペテルブルク周辺のような豪華な離宮はあまり現存していない。数少ない例外の一つが今回ご紹介するクスコヴォだ。モスクワ市内にあるうえ、地下鉄からも徒歩圏内で交通の便もよい。広大な敷地の中に立つ豪華な宮殿を中心としてフランス風庭園や人工池、逍遙路に沿っては「オランダ小屋」や「エルミタージュ」、あるいはイタリア風の「グロット」や「スイス小屋」といった個性豊かな建物が点在していて飽きることはない。

両袖にスフィンクスを配した正面階段を上って宮殿に入ると、そこは18世紀ロシア貴族の豪華絢爛な世界。格調高い内装や家具調度品を堪能することができる。中でも「鏡の間」

はフランスのヴェルサイユ宮殿に対抗したというだけあって一見の価値がある。別館のポリシャヤ・カメンナヤ・オランジェレヤでは18世紀当時の陶器のコレクションを見ることができる。また、宮殿内ではしばしばコンサートも催されるの

鏡の間



だが、残念ながらこればかりはヴァーチャルで、というわけにはいかない。時が来たらぜひ訪れてほしい。

(札幌大学地域共創学群教授)

クスコヴォの庭



ポリシャヤ・カメンナヤ・オランジェレヤ

止面玄関